

発 明 文 化 論

〈第 88 回〉

丸山 亮

アルガンオイル

モロッコを旅してきた。イスラム世界が騒然とするなかで、この国は落ち着いていて、表面上、騒動とは無縁のように思えた。一つには王国という国の形が、社会を歯止めのない変容から守っているのかもしれない。首都ラバトにあるムハンマド5世の霊廟や、カサブランカに築かれた世界最大級のハッサン2世モスクなど、王権とつながりが深い宗教的な建造物も、権力者による力の誇示というより、民衆の信仰心が結晶した優美な建築物のように見える。

国を東西に横断するアトラス山脈は、その北と南を全く違う風土に分けた。北は地中海式の気候で緑が濃く、街路樹などのオレンジが目を楽しませる。それがアトラスを越えるとき、2千メートル以上の高所に来ると、雪は目の前で、スキー場があったりする。そして山脈の南は、サハラ砂漠に連なっている。

モロッコは現在アラブ世界の一角を担ってはいるが、歴史的にこの地を最初に支配したのはベルベルと呼ばれる遊牧民だった。ローマ帝国の支配下だった時期を経たのち、やがてイスラム教の勃興とともにアラブ化していき、19世紀以降はフランスの保護領となるなど、変転を繰り返して、20世紀の後半、ムハンマド5世の時代に独立国となった。今日人口の3分の2はアラブ系で、彼らが都市部に住むのに対して、残り3分の1のベルベル人が農村部や砂漠に住んでいる。このベルベル人たちは日干し煉瓦で築いた住宅に住みながら、牧畜のほか、ヤシの実の加工などで現金収入を得て生活しているようだ。もろい土の壁は時がたつと崩れていき、廃屋になる。ヤシの木が茂ったオアシスのなかに点在するそうした廃墟は、どことなく日本的な無常観を呼び覚まし、旅情をそそる。

アトラス越えの時、土地の特産品アルガンオイルを売る店に立ち寄った。モロッコの南西部にのみ自生している広葉常緑樹アルガンの種子からとった油が、「モロッコの黄金」とも呼ばれるアルガンオイルだ。砂漠の厳しい環境に耐えてきたアルガンには独特の薬効が認められ、古来、子供が生まれるとその肌に油をさして健康を祈願したという。食用、美容などに利用価値が高いようで、今日、需要は世界に広まっている。オレイン酸、リノール酸や、ビタミンEに富む。

店の入り口には数人のベルベル人女性が腰を下ろし、油を搾る作業を実演してみせる。固い種子を石で割り、白い核を取り出して石臼で挽くと、油が少しずつ出てくる。200個の種子からわずか50ミリリットルしか搾れないといい、かなり貴重なものだ。こうした実演が観光用、宣伝用なのはもちろんで、自生地に近いアガディールの町に生産組合が組織されている。売店には日本人の学者による成分分析や薬効などを示す論文も掲示しており、事業に日本の援助があるのかもしれない。ところが需要の急増から、一時アルガンの木が絶滅の危機に陥ったため、現在は採油の時期が限定されているという。

需要の高まりにもかかわらず生産量が限られているとなれば、水増しが行われるのは必然で、モロッコ各地で売られるアルガンオイルとそれを使った様々な商品は、不純物により増量されているらしい。

先住民ベルベルが伝統的に守ってきた、アルガンの木から油を搾りだし様々に役立てる知識は、今日、各地に広がった。それが伝統の保持者を少しでも潤すことにつながってほしいが、商業的な外部からの搾取に行き着くならば悲劇だ。モロッコの特許は、ヨーロッパの特許をそのまま承認することになっている。アルガンオイルを使ったヨーロッパの特許が、モロッコの地場産業を委縮させるようなことになってはならないだろう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)